

黒毛和種ET産子哺育技術の向上

【研究概要】

都内では受精卵移植（ET）技術の普及により、乳牛より黒毛和種子牛を生産し、人工哺育を行う酪農家が増加している。都内酪農家が利用する子牛市場で利益を得るためには120日齢で十分な体重まで育成する必要があるが、多くの酪農家が安定して利益が出せずに苦慮している。そこで、黒毛和種子牛の120日齢出荷に適した哺育方法を検証することを目的に試験を実施した。その中で、今年度は下記の成果が得られた。

- （1）青梅庁舎飼養牛3頭について、120日齢で体重は161～182kg、体高は100cm前後まで発育し、3頭とも日増体量（DG）は1.0を上回っており、初乳給与も十分であった。
- （2）腹胸比は3頭とも120日齢で、第一胃が十分に発達している指標（1.2）に達しており、 β ヒドロキシ酪酸（BHBA）についても指標（0.3mmol/L以上）を、3頭とも120日齢で到達し、そのうち2頭については離乳後90日齢で到達した。濃厚飼料摂取量は、離乳時に1.5～2.5kgに達し、離乳後は2週間程度で4kgまで増加、糞スコアも異常は認められなかった。
- （3）青梅庁舎と都内農場での哺育手法を比較したところ、青梅庁舎が最も安価であり、第一胃の発達も十分だったが、120日齢の体重は都内農場の方が大きい事例が認められた。